

人と企業と地域と



挑む長州産業の岡本社長



谷口 義晴社長

日本セラミックは、自動（釜心の転機は三十八歳の時）照明や自動ドアなど近代生活に欠かさないセラミックセンサーの世界有数のメーカー。鳥取県唯一の上場企業（天証二部）でもある。「娘の部屋を借りて、何りも論議した。あれがスタートだった」。谷口義晴社長

仁義もあり、競合しない新分野にかけた。その先見性が当たり、五カ月後、三洋電機のカラータレビ「スバコン」のリモコンに、開発した超音波センサーが採用されて、道が開けた。

仁義もあり、競合しない新分野にかけた。その先見性が当たり、五カ月後、三洋電機のカラータレビ「スバコン」のリモコンに、開発した超音波センサーが採用されて、道が開けた。



小松 昭夫社長

三菱農機に勤めていたが、岡本要社長（五十五年前）の退社シーンだ。「大番頭」は四十億円で達する見込

たどって来た。地元の農機立した起業家もいる。「上した山口日本電気のメンテナンス業務に食い込み、産るべきことは終わった」。長府製作所の当時の取締役（集積回路）の知識を蓄積した。

これをバネに半導体関連分野や産業用ロボットなどのメカトロニクス分野にウイングを広げ、今期の年商は四十億円で達する見込

起業家 経験基に着想で勝負

までかき集めて、同じ焼き物のファイインセラミックスを利用したセンサーの製造を始めた。辞めた会社への

中。国際企業として業績のを機に退社した。二年後の七三年「電気と機械の知識を生かしたい」と資金十万円、中古車一台を元手に弟と二人で出発。農業用取水ポンプの修理が始め、やがて給水施設の集中制御システムや、車が近付くと瞬時に開閉する高速シートシャッターを開発。三十五億円企業を築いた。

の突然の辞職に続き、同じ太陽熱温水器の製造メーカーを起したため、「造反うち、自分の持ち株率は二八％にとどめ、残りはすべて三年以上勤めた社員に配分、一〇％配当を続けている。

「社員のおかげ」と資本金二億一千二百万円のうち、自分の持ち株率は二八％にとどめ、残りはすべて三年以上勤めた社員に配分、一〇％配当を続けている。

第一部 革新のうねり ③

「夢と理想を失うと古い」と、新しい物づくりに

資金10万円で出発 島根県八束郡八雲村、小松昭夫社長

あえて苦勞を買って、自

の山口県厚狭郡楠町に進出



山口 博之社長

チャレンジ精神が道開く



奥田 廠社長

中国地方の戦後のニュービジネスの草分け的存在は医療機器メーカー、OG技研（岡山市）の奥田廠社長（五七）。旧満州（現中国東北）での電気技師の腕を生かして、四九年に創業。国内初のけん引治療装置を開発し、リハビリ機器部門のトップメーカーに育った。「発明は誇大妄想から生まれる。ダメだからやるのが、発明だ」をモットーに、年間二百件を上回る特許を申請して、業界をリードする。

体駐車場の設計技術を生かし、石川島播磨重工業（IHI）から独立した脱サラ組。「新しい空間ビジネスの発見」を掲げて昨年、世界初のビル組み込み型駐車装置を開発した。特許申請年間200件